

「平成28年度花葉会海外ツアー 東チベット」に参加して

高野 恵子

平成28年7月11日から7月19日まで、中国四川省成都の北西部・東チベットの植物観察ツアーに参加した。今回印象に残ったのは、第1回から参加している前会長の鈴木さんが「今までで一番花の種類を多く見られてよかった」と言われていたことだ。本当にたくさん高山植物を見られて幸せだった。それとともに、四川省の辛くて油っこい料理と高山病の経験も強烈だった。通貨はツアー時点で1元=16.8円。

7月11日（月）

成田空港には14時集合。添乗員の青木さんを含め総勢22名。結団式では、今回は特に3,000m以上の高山に行くということで、高山病の予防のために、走らない、水をできるだけ多く飲む、アルコールは飲まない、食べ過ぎない等の注意がされた。出発はANAで17時25分発、成都には現地時間で22時（時差は1時間）に着いた。ガイドは日本語の上手な余（よう）さんという男性でホテルまでの40kmに成都の説明をしてくれた。成都は2,300年前からの歴史ある都市で、三国時代は蜀の国、劉備と諸葛孔明がよく知られている。人口は、800万人。雨が多く1年の4分の3は曇りの日だという。盆地で車が多いためスモッグもひどいそうだ。

7月12日（火）

四川省の8年前の大地震では死者8万人、行方不明者が9万人以上出ている。まだ交通の便は十分ではなく、この日の目的地・日隆までは回り道をして10時間かかるのと、成都の西にはアイフォーンの部品や飛行機の部品、トヨタ・ワーゲンなどの工場があり、8～9時はラッシュがひどいというので7時15分に出発した。この日から、四川大学准教授の白さんという女性が専門家として加わった。1時間ほどして高速道路に入り、平野部から山に入るとトンネルが続き、川に沿って傾斜のきつい山道を走って行くようになった。10時過ぎにはアパチベット自治州チャン族の村に入った。このあたりでは独特の石の家が見られた。通っている道は317北線と言うラサまで続いている国道で、

今も新しい道路がどんどん作られており、もう1本の工事の道は2年後にはチャン族の州都まで行くという。道路の左右は、すさまじい造山運動がわかる褶曲がむき出しの山が迫った傾斜で、それがずっと続いている。途中から、その傾斜にリュウゼツランの一種の植物（サイザルアサ？）が見られるようになった。干ばつ地によくできるそうで、繊維をとるためアメリカから持ってきたそうだが、土地にあっているのか広い範囲にたくさん生えていた。

11時30分に理県（リ）の町に入り（1,700m）、ここで昼食をとった。ご飯に幾種類もの炒め物や煮物が出てきた。辛さは通常の半分を抑えているということだったが、味は悪くないものの結構辛くて、ずいぶん食べ残した。

12時30分に再び出発。少し走った道の左手の方向は四姑娘山の裏側だそうで、トンネルを抜ければ10分で四姑娘山に着けると言うが、今は大回りをしなくてはいけない。道の途中には、ピンクのシュウメイギク、2種類の白いバラの花がたくさん見られた。河ぞいの畑には白菜やトウモロコシ、キャベツが栽培されていた。

3,000mあたりの道路沿いで植物観察が行われたが、動くとはとなく息苦しい。赤いバラ、シナワスレナグサのブルーの花、白いクレマチス、黄色の小さな花をたくさんつけたクレマチスなどのいろいろな草花が見られた。また、白い花のナナカマドの木がたくさん見られるようになり、このあたりから木の多い植相に変わった。2,600mあたりの分岐点で休憩のとき、ヤクのヨーグルトが売られており、珍しいということで買って食べてみると、少し酸味のある濃厚な味だった。その後4,114mの峠で植物観察が行われ、赤い花のメコンプシス・プニケア (*Meconopsis punicea*)、黄色やピンクのサクラソウなどいろいろな草花が見られたが、息をつめて写真を撮るとくらくなって息苦しい。わが夫は昼食後から気持ちが悪くなり、その後バスの中でホテルまでの間に5回も吐いた。

峠から下り始めたときには17時近くになっており、日隆のホテル（3,100m）に着いたときには20時を過ぎ

ていた。そのまま夕食になったが、みんなくたくたになっており、食べることのできない人が出始めていた。

7月13日（水）

朝食は8時だったが、高山病の人が出始めたため青木さんと事務局が相談して、海子溝方面に行くことをやめ、ホテルの前から3kmほどの斉戒坪にハイキングに行くことになった。夫も動けなくて、酸素の缶詰（1本40円）なるものを買って、吸って寝ていることになった。元気な人は9時出発で、50分ほど登ると料金所のあるゲートがあった。ゲートに入ると馬で登山できるようになっていて、片道180円とのこと。私たちは写真を撮りながら登り、12時30分頃には目的地について弁当を食べ、ホテルに戻ったのは14時過ぎだった。植物は登り口からゲートまでも見られたが、ゲートに入るとすぐにお花畑になっていて、アキレア、オダマキ、ランタンキュラス、小さな黄色やピンクのチドリソウ、3色のクサジンチョウゲ、青色のプリムラ、アズマギク・・・ときりがいいほどいろいろな草花が咲いており、目的地まで飽きなかった。



斉戒坪にて

ホテルに戻ると、数人の状態が悪くなって、高山病専門の医師が呼ばれることになっていた。医師の診察で麓に降ろすほどのことはないとのことで、酸素ボンベ（といっても枕くらいの袋に入ったもの）で治療することになった。そのときの注意は、酸素が薄くなるから暖房をつけてはいけぬ。窓を開けて寝なさい、というものだった。食事は前日とほとんど変わらず、テーブルに並びきれぬほど炒め物や煮物が出てくるが元気な人もあまり食べられない状態。

7月14日（木）

この日は朝から雨だったうえに、ホテル前で大きな

トラックが横転したために道路が通れなくなっていた。ぬかるんだ道路は車でいっぱいになり、結局、巴朗山に向けて出発したのは11時50分だった。巴朗山は四姑娘山から南方面の山で、4,000mの峠付近まで行った。夫もまだおかゆしか食べられないが動けるようになって一緒に出発。このころから食べられなくて動けなくなる人も出ていた。

バスは、やっとすれ違いができるような山道を登って行き、3,800m、3,900m、4,000mと順番に植物観察を行った。植物は、数えきれぬほどのケシ科、サクラソウ科、リンドウ科、キンポウゲ科、バラ科・・・と私などは初めて見る高山の草花類のお花畑が道路の上下に咲いていた。余さんの話では1週間違っても見られる花は異なるそうだ。3,800mあたりで黄色のメコノプシス (*Meconopsis integrifolia*) の終わりに近い花が見え、そこから上に、青色のメコノプシス (*Meconopsis balangensis*) が見られるようになった。4,000mの地点では、青色のほかに紫色や中間色、より鮮やかな空色のものなどもみられた。



青色のメコノプシス
(*Meconopsis balangensis*)

帰りの道では雨が止んできて日がさすようになった。途中、道路わきの展望所で四姑娘山の4つの頂がきれいに見えた。四人姉妹の山とされていて左端の末娘・玄妹山が一番高く6,250mある。

ホテルに戻ると、まだ高山病の具合の悪い人がいて再び医師が呼ばれていた。

7月15日（金）

天気は良く、次の宿泊先・康定にむけて7時30分に



四姑娘山

出発した。1時間ほど進んだところから、もう1か所植相の違う山に寄って行くということで、俠金（きょうきん）という村を通してチベットに行く峠のほうに向かった。途中3,000mのところには湿地があり、ヤナギイチゴ（沙棘・サージュ）が生えており、5月にはサクラソウがたくさん咲くところだそう。湿度が多いのかサルオガセがたくさん見られた。このあたりからシャクナゲが見られるようになり、急な傾斜の道を登って行くと少しなだらかになって牛が放牧されており、どこも、かわいい色とりどりのお花畑だ。上方からはチベットからの大きなトラックが列をなして降りてきていた。

1時間ほど登った3,900mの地点が峠でチベット人の家が数戸あり、神様を祀った建物があった。このあたりのシオガマやサクラソウは赤色が大変濃く、ケシ科のコリダリスも青色があざやかで美しかった。少し上の岩場のメコノプシスには色の変異が多く、茶色がかかったものや紫色、もっと上方の岩場には赤に近い紫色のものも見られた。

元の康定への道に戻って下り、12時50分ごろ川沿いの小金の町で昼食をとった。ここでは辛さも控えめの料理が出され、皆食べられるようになった。15時頃に、丹巴の町に入り、ここから大東河に沿って下った。小金や丹巴はチベット族の美女の多い町だが、今は若い人は都会に行って年寄りばかりだと、余さん。建物は、来た時のチベット族の石の家とは全く違った白い漆喰の家が多い。丹巴から少し行った対岸には、ポーローという200~300年前ののろし台が集中したチベット族の村が見られた。康定は標高2,700m、川沿いの大きい古都で18時30分に着いた。

7月16日（土）

この日は5台のワゴンに分乗して雪門山峠の植物観察に行った。出発は8時で、9時30分頃に3,500m地点

から順次道路沿いで植物観察をした。ここで、岸上にアツモリソウの仲間（*Cypripedium tibeticum* var. *corrugatum*）の開花株を見ることができた。



アツモリソウの仲間
(*Cypripedium tibeticum* var. *corrugatum*)

このあたりの草原には、紫色のイリスやオレンジ色のクリンソウ、ピンクのテガタチドリ、幾種類かのリンドウ、ウメバチソウなど前日までとは違った植物が見られた。もう少し上の湿地には面白い形のレウム（*Rheum alexandrae*）がみられるようになり、そこから上に行くと草原に2cmほどで空色、淡いピンク、白色のリンドウ、葉や茎に棘のない空色のメコノプシス、赤色、桃色、黄色、青色のいろいろな種類の小さなキク科の花、ヒナウスユキソウの仲間等が見られた。また、途中の道路沿いには、冬虫夏草の研究所の建物があった。このあたりの上からは一面背の低いシャクヤクの群落になり、3,830mの峠には12時30分ごろ着いた。峠は広い草原になっており、左方向には雪をかぶった山が連なっており、右方向の傾斜の下方は小さい湖のある湿地になっていた。ここで弁当。植物はそれまで見てきたものとあまり変わらなかったが、ブルーのきれいなリンドウが多く見られた。湿地のほうに降りる傾斜地は、たくさんの色鮮やかなサクラソウやリンドウ、メコノプシス、チドリソウ、コリダリスなどが見られ、湿地にはレウムもある観察に適した場所だった。

しかし、たくさんビニールや弁当ガラのごみ投げ捨てられていたのは、残念なことだった。

帰る途中、草原から大分下った道路の上にユリが咲いていると止まってくれた。崖の上で登るのが難しかったが、無理に上ってみると花卉の反転したユリ（*Lilium duchartrei*）だった。

ホテルに戻ってからみんなで街に買い物に出かけた。この名物はソバ菓子ということで土産に買った。ホテルでは、チベット人の結婚式が開かれており、玄関

で正装した花嫁、花婿が客を迎える姿を見ることができた。



レウム (*Rheum alexandrae*)

7月17日 (日)

ホテルを7時45分に出発して成都へ大東河に沿って下った。南のほうは彝族が住んでおり、ビワの木が多く見られた。岸には赤いユリ (*Lilium davidii*)、白いユリのリーガルリリー (*Lilium regale*) が多く咲いていた。出発してから1時間30分程するとチベット族から漢族の町に入った。瀘定県に入ってトウモロコシが多くみられるようになり、ジャガイモは見られなくなった。下っていくとハウスが見え始め、米の栽培が見られ、芭蕉も時々見られるようになった。右手方向にミニヤコンカ山、氷河があるという場所を通ったあたりからユリは見られなくなり、ミカン、落花生が出てきて、急に赤土になった。11時45分ごろ対岸の石綿の町に入り昼食をとった。この食堂ではクコやナツメの入った薬膳鍋が出され、辛さは自分で調節することができたことから皆安心して食べられた。石綿の1,000mのあたりには人の背丈もあるメコノブシスがあると余さんが言っていた。13時15分に出発して高速道路(国家高速道路5号)に入った。成都まで330km。大きな森の中を走り、14時40分ごろサービスエリアに入る。竹が多くみられるようになり、青衣江を渡った。お茶の産地である毛長山を通ると平地になり、お茶畑が広がっていた。このあたりからオレンジ色の実を付けたクワ科の構(コウ)の木が道路沿いに見られた。成都の町には16時55分に入った。

7月18日 (月)

8時に出発してバスで成都植物園に行った。8時40分に着いて、植物園の人との交流会が行われた。70haに従業員が70人で、うち30人は技術員だという。その後、植物園を見学したが、ただただ広かった。

11時30分出発。そのまま高速に乗ってパンダ研究所

に行く。ここで昼食。園内の長い距離を歩いてパンダは見られたが、ほとんどお昼寝中。保育器に入っているパンダの赤ちゃんも見られたが、見学者で一杯だった。

出発は14時47分。

15時30分に菓草市場に連れて行ってもらったが、残念なことに驚くほどたくさんの数の店舗はほとんど閉っていた。着く時間が遅すぎたので、ここにもっと早い時間に来てみたかったと思った。それでもまだ空いていた数軒の店舗をのぞき、余さんに聞いてもらいながら、みんなで干しブドウ、クコの実やナツメの乾燥したものを買った。

7月19日 (火)

ホテルを6時出発で、6時30分に空港に着いた。飛行機は9時5分に出発して、成田に15時25分に到着し流れ解散となった。

今回も、事務局のみなさん、青木さんにはたいへんお世話になりました。